

I 学校の概要

個を活かす協働的な学びの推進モデル校事業

高松市立山田中学校

◆児童生徒数及び教員数

○児童生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
6学級	5学級	5学級	5学級	21学級
177名	168名	179名	18名	542名

○教員数 40名

◆学校の特徴

「あいさつ・うたごえ・ボランティア」が本校のスローガンである。生徒会主催のあいさつ運動には、自主参加による多数の生徒が正門付近に集まり、元気なあいさつの声で学校生活が始まる。また、校内合唱コンクール (Yamada Music Festival) では、各学級の団結のもと、レベルの高い合唱を作り上げ、聴く者に感動を与えてきた。昨年度については、新型コロナウイルス感染症予防のため、各活動は中止または縮小され、生徒が協働して行う活動の場が失われた。それでも、生徒は前向きに明るく学校生活を送っている。

本校の生徒の多くは素直で、他の人の意見を聞き、指示されたことに対して真面目に取り組む。また、温和で、人当たりが良く、困っている友達を助けることができ、授業中も協力して活動する場面を目にする。反面、物事に対して受け身で、自分で考えて行動することが苦手な生徒もおり、課題に対して、じっくりと考えずあきらめたり、自分の考えをうまく伝えられなかったりすることもある。また、1日あたりのゲームやスマートフォンの使用時間は県平均と比べて多く、表現力や自己管理能力に課題があると思われる。

II 研究主題等

研究主題

学ぶ喜びを共感し、自ら学び続けようとする生徒の育成

—なかまとともに「主体的に学び、考え、表現する」授業の工夫—

◆研究主題設定の理由

本校では、昨年度より上記の研究主題で研究を行ってきた。

元来、特別の教科「道徳」への取組が計画的で、行事等との関連も図られている。チームで道徳の授業の工夫が行われ、生徒も話し合い活動等に意欲的に取り組んでいる。そこで養われた道徳性を生かし、課題である表現力や自己管理能力を高めつつ、生涯学習を視野に入れた学びに向かう力を身につけさせたいと考えた。加えて、ピア・サポート活動も計画的・系統的に実施し、グループの力や感情理解、社会性育成のトレーニングを行った。そのことにより、令和2年11月の生徒調査では、「学校では安心して自分

前

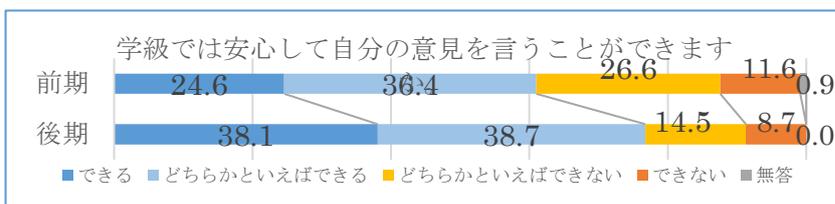


図1 生徒調査 (前期令和2年6月、後期11月)

の意見を言うことができますか。」という問いに対して、「できている、どちらかといえばできている」と答えた生徒が大きく増加し、生徒が思いや考えを安心して伝え合うことができる基盤ができてきたと考えられる（図1）。

上記のような、なかまづくりの活動を基盤に、教育活動の様々な場面で、自ら考え、主体的に判断し、対話的な活動を通して、よりよく問題を解決しようとする場を設定するなどの授業改善を進める。その上で、ともに学ぶ喜びを共感し、自ら学び続けようとする態度を育てるとともに、基本的な生活習慣、自己有用感、達成感、挑戦心、学校生活、規範意識、家庭学習、学習習慣に関わる諸問題についても改善を図りたいと考え、上記研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

(1) 問題解決的な学習の工夫→「見通し」「探究」「振り返り」の場面で工夫のある授業

① 「見通し」の場面

- ・ 生活に結びついた、生徒の問題意識に沿う課題の設定
- ・ 自己選択や自己決定ができる多様な学習を深める場の工夫

② 「探究」の場面

- ・ 対話的学びにピア・サポートのFELORモデル、オウム返しの手法を取り入れる

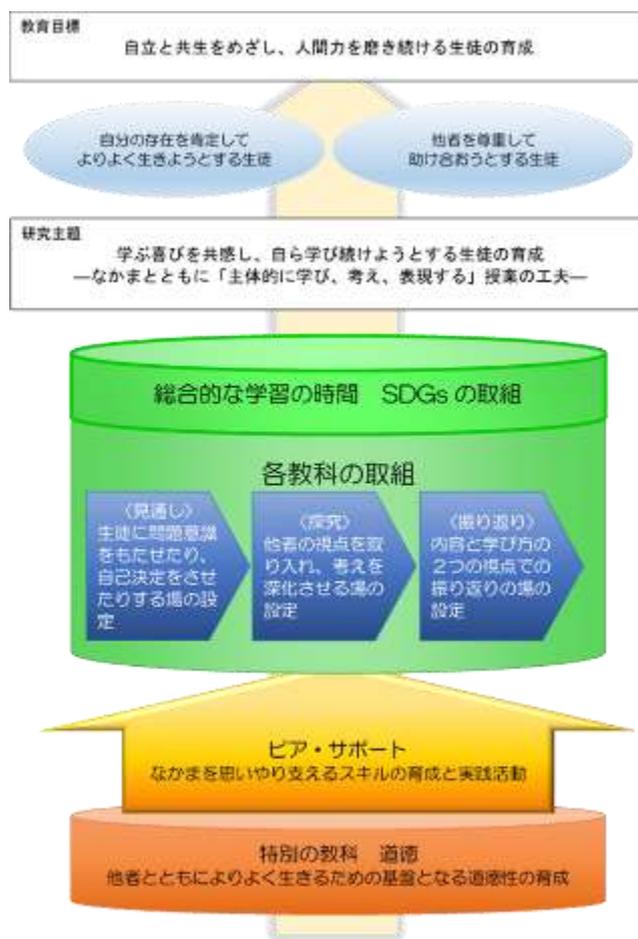
③ 「振り返り」の場面

- ・ 内容と学び方の2つの視点による振り返りシートの作成（山田中モデル）
- ・ ICTを含めた思考ツールの活用

(2) 教科横断的な研究組織作り

授業づくり部会	<p>〈各教科〉 なかまとともに「主体的に学び、考え、表現する」授業を工夫・実践・評価する。</p> <p>〈総合的な学習の時間〉 SDGsをテーマに、探究的な活動を工夫する。</p>
なかまづくり部会	<p>〈特別の教科「道徳」〉 生徒が道徳的価値について主体的に考え、議論できるような学習を工夫・改善する。</p> <p>〈ピア・サポート活動〉 グループの力や感情理解、社会性の育成のトレーニングや、問題解決能力、対立解消スキルを身につけるためのトレーニングを行ったり、実際に友人をサポートする経験を行ったりする。</p>

(3) 研究構想図



III 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1 (生徒質問紙) 学級では、安心して自分の意見を言うことができますか。

指標 「①できる+②どちらかといえばできる」の合計



指標の達成に向けた実践

○ 一人ひとりの多様な考えを生かした対話活動を行うための土台作り

一人ひとりが自分の意見を出すことで、様々な価値観が表出する。そのようにして、対話に多様性が生まれることで、考えの深化・拡充が図れる。その土台となるのが、支持的風土の醸成であると考える。

本校では、そのような安心して自分の意見を言うことができる支持的風土を作るために、次の2点に取り組んでいる。

(1) 他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性の育成

本校の道德の授業の実践は、年間指導計画に基づき、「ローテーション道德」など、チームで授業づくりを行う体制が整っている。また、道德だより等で、保護者への啓発も行ってきた。

本年度は、特に「なかまづくり」に関連する内容項目の指導の充実を行った。1年生では、「言葉の向こうに」(B-(9)相互理解・寛容)という教材を用いて、様々な考えをもつ人との関わり方について考えるため、小グループでの自己決定に基づく筆談を用いた展開を行った。生徒は、主人公(サッカー選手Aのファン)とネット上でAを非難する人のどちらか

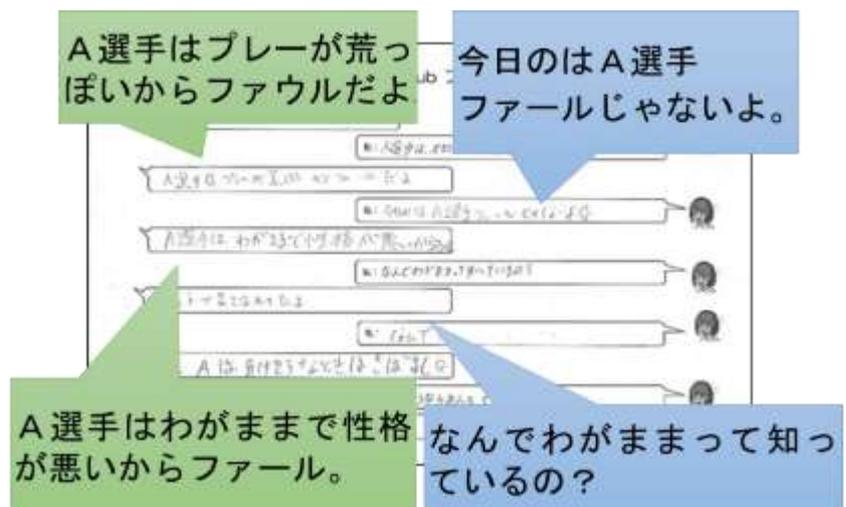


図2 筆談による交流

を選び、ワークシート(図2)上でネットのやりとりを実演した。その後、言い争いを収めるためには主人公にどんなアドバイスをすればよいかを考えた。

この授業を通して、自分と価値観が違うのは当たり前であり、相手の気持ちを考えて発言することの大切さに気がついた生徒が多かった。

(2) 向社会スキル育成のためのピア・サポート活動

ピア・サポート活動とは、他者への関心を基に仲間としてよりよく支援していく取組である。実践を行う上で、定着を図るために年間を通じてトレーニングを行う計画を立てた。活動内容も、段階に応じてスキルを積み上げていける年間計画を作成した(表1)。

また、掲示物(図3)を作成し、教室に掲示した。このことで、ピア・サポート活動で行った対話のスキルを各教科でも活用することができ、生徒は授業内容を思い出して交流しやすい環境を作ることができた。

表1 ピア・サポート活動年間計画

	1年	2年	3年
1	グループの力を知ろう	復習 グループワーク	復習 聴取スキルと感情理解
2	お互いのことを知ろう	復習 聴取スキルと感情理解	復習 問題解決スキル
3	双方向のコミュニケーション	私のハート	対立の捉え方
4	積極的な聴き方	復習 包みをしっかり聴こう	課題解決のロールプレイング
5	感情話を増やそう	ブレインストーミング	対立を解消しよう
6	気持ちに焦点づけた聴き方	紙上で課題解決の流れをつかむ	いじめのロールプレイング
7	包みをしっかり聴こう	5つのステップで課題解決	怒りをコントロールしよう
8	アサーション・トレーニング	困った状況と守秘義務	いじめはしないと宣言しよう



図3 ピア・サポート活動掲示物

○ 対話を深める思考ツール、ICTの活用

思考ツールやICTは、自分の考えを深めたり、整理したり、またそれを相手に伝えたりするのに効果的である。

昨年度と同様に、美術の鑑賞の授業では、自分の感じたことを付箋に書いて作品に張り、作品の情景を物語にすることで、作品の見方を広げ、鑑賞を楽しむ授業を行った。

また、技術・家庭の献立作成の授業では、レーダーチャートを使って課題を明確化し、改善点を話し合うことができた(図4)。音楽の「曲の構成に注目して、音楽のまとまりを理解し、曲想の変化を味わおう」という題材の授業では、ICTを活用して音楽を聴き返すことのできる環境を作り、新たな発見を共有し、音楽を通したコミュニケーションを積極的に図る工夫がなされた(図5)。



図4 レーダーチャートを活用した交流活動



図5 ICTを活用して班で曲を共有

2 (生徒質問紙) 授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいますか。

指標 「①取り組んでいる+②どちらかといえば取り組んでいる」の合計



指標の達成に向けた実践

学習課題は、授業の中で生徒自身が、「これが知りたい」「これを追求したい」と考える起爆剤の働きをするものである。つまり、生徒にとって魅力的な学習課題の設定は、「主体的に学び、考え、表現する」授業にとって必要不可欠であるといえる。

では、どのような学習課題を設定すれば、生徒は自ら進んで、「知りたい」「深めたい」と思えるのだろうか。本校では、課題解決の「見通し」において学習課題を設定する際、次の2点を意識することで、生徒が課題を解決する必要性を感じ、「主体的に学び、考え、表現する」授業作りができるのではないかと考えた。

- ・ 生活に結びついた、生徒の問題意識に沿う課題の設定
- ・ 自己選択や自己決定ができる多様な学習を深める場の工夫

○ 生活に結びついた、生徒の問題意識に沿う課題の設定 (社会科の取組)

実生活に結びついた学習課題は、学習の成果が、そのまま自分たちの生活に返っていくため、生徒の意欲を喚起しやすいと考える。

社会科では、実社会・実生活に関連した内容を取り扱った問題解決的な学習になるように心がけた。生徒の事実認識とのギャップを作ることで、生徒の興味・関心を喚起し、解決したいと思う学習課題になるよう工夫を行った。

3年次の公民の授業では、将来自分も関わってくるであろう「選挙」を取り上げた。「さまざまな考えを参考にして、自分がよいと思う政党に投票しよう」という課題を設定し、自分たちで選ぶ、自分たちの未来を決めるという体験を行った(図6)。友達と対話的に自他の判断を練り合っていく学習を繰り返していくことで、公正な選挙が行われることや、選挙に参加することの重要性についての認識と判断する力が育まれることをねらった(図7)。



図6 各班の意見を掲示



図7 交流活動

○ 自己選択や自己決定ができる多様な学習を深める場の工夫（国語科の取組）

生徒自身が学習課題を選択したり設定したりすることは、学習課題を自分事として捉え、課題を追求していくための大きな動機付けとなる。また、それをどのように追求するかも選択できることで、生徒は「どのように学ぶと学習課題をより深く追求できるのか」と考えるきっかけになる。

国語科では、生徒の疑問を基にした授業や課題を解決する手立てをわかりやすく提示したり、選択し
たりできる場面を設けた。『「分かる」「納得できる」「気になる」と思わせる本論の工夫は何だろうか?』
という学習課題のもと、生徒が着目した具体的な課題を黒板に掲示し、生徒が興味をもった課題を選択
し、それを追求していった（図8）。

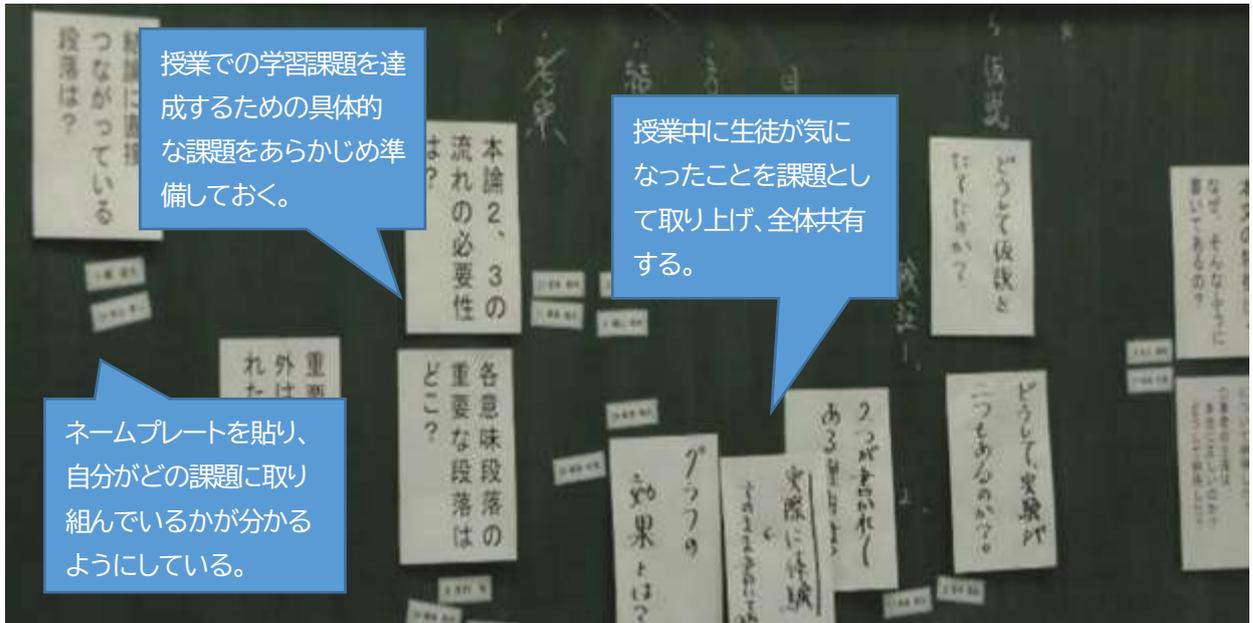


図8 課題を解決する手立て

学習形態に関しては、個人で行ったり、グループで行ったり、教師に聞きに来て一緒に学習したりと学習に合わせて選択できるようにした（図9）。また、文学的な文章や説明的な文章の「読みのガイド」を作成し、読みを深めていく見通しをどの教材にも活用できるように、生徒に作らせる実践を行った。



図9 学習に合わせて生徒が選択する学習形態

学習のゴールを明確に示し、学習の見通しや手立てをもつことで、何をどのように学習したらよいのかが分かり、課題に積極的に取り組む生徒が増えた。また、難易度を変えた課題を準備しておくことは、生徒の主体性を育てるには有効な手段であった。生徒主体の授業では、生徒の柔軟な発想や考えを見ることができた。

これらの学習課題の工夫により、生徒は、学習課題を、自ら解決すべきものであると意欲的に捉え、自
らなかまとともに課題を解決しているという実感をもてるようになったことが分かる。課題を自分事とし
て捉え、追求したいという意欲こそが、学びに向かう力を育むのである。

◆特徴的な取組

3 (生徒質問紙) 授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



○ 内容と学び方の2つの視点による振り返りシート

まずは、内容と学び方に分けて記入欄を設け、生徒が自らの学び方に注目し、自己の成長を自覚し、新たな学びに向かうような振り返りの場となることをねらった。また、生徒の思考を助けるため、あらかじめ思考の流れを想定して作成したフローチャート式の振り返りシート(図10)を作成した。教科横断的に同じ形の振り返りシートを使用することで、生徒は振り返りの見通しをもつことができ、教師側が意図した生徒の学びの成長を把握することができると考えた。

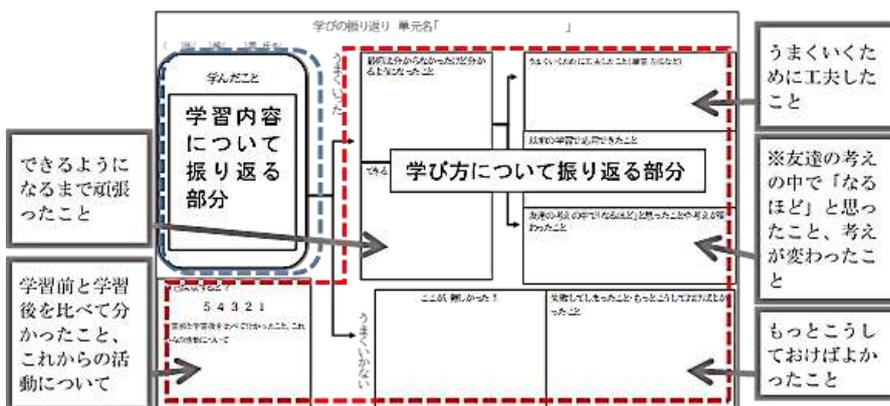


図10 振り返りシート

フローチャートの項目には、対話的な学習の場面では、友達の考えを聞いて、自分の考えを広げたり深めたりできたか、粘り強く学習に取り組んだか、自らの学び方を調整しようとしているかなど、生徒の学習過程がわかるものになるよう工夫した。

振り返りシートを導入した令和2年度には、学び方について書けない生徒が目立っていた。しかし、令和3年度には、下表(表2)のように、学び方を振り返って改善しようとする言葉が見られるようになった。

表2 振り返りシートの言葉

〈課題の発見〉	〈解決に向けた見通し〉
次はこういうことをするな、次に考えることは何だろうという見通しをもつ。	どのような手段でゴールにたどり着くかが分からなかった。そのため、表にしてまとめた。
どうやって進めたらいいのか、単元のゴールにどうやたらたどりつけるのかを考える。	物事にはすべて理由、原因があるので、その原因を突き止めて、幼児のためにできることを考えたい。よく転ぶのは頭が大きくてバランスがとりにくいか…もっといろんな視点から物事をとらえようと思う。
疑問があまり持てなかったので、「なぜ」「どうして」という気持ちをもつ。気になることや、どうしてそうなったのか、などの考えをもちたい。	
〈対話の場面〉	〈学習を終えて〉
班活動の時に同じ人としか対話ができず、意見の幅が狭くなってしまったので、できるだけ話して、意見の幅を広げる。	考えたことを、どう普段の生活に活かしていけるかを考えながら、授業を受けたい。
自分の意見をはっきりもつようにする。	少しでも粘り強く調べていたら、見つけたときのうれしさがすごく、感動した。他の授業でも活用することができた。
自分と違う意見なのは、とても貴重なものだと思った。	

IV 研究の成果と課題

◆研究の成果について

(1) 全員参加

道徳での思いやりなどの道徳的価値の高まりや、ピア・サポート活動での温かな関わりを生む体験活動を行った。それにより、学級が、全員参加の授業のための安心できる場になったことが分かる(図11)。

また、思考ツールやICTの充実は、交流する際に、多様な考えが表出し、多面的多角的に考えられる環境作りにつながり、生徒は話し合う活動を通じて、自分の意見を深化・拡充することができた。

(2) 学習課題

生活に結びついた学習課題の設定や、自ら学習課題を設定する機会を設けた。その結果、生徒は学習課題を自ら解決すべき課題であると捉え、問題解決学習を行っているという実感が高まった(図12)。

(3) 振り返り

次の振り返りは、本年度の生徒が、学び方について記入したものである。

- ・ 分からなかったら、ぼーっとせず周りの人に聞く。ぼーっとするのが一番だめ!聞くだけでなく、友達意見をメモする。それをもとに、再び、自分の意見を考え、理解していこうと思う。
- ・ 小学校のころは、分からないなら分からなくていいと思っていた。しかし、中学校の国語授業を受けて、「最後まで、分かるように取り組むことが大切だ!」と学んだ。少しでも粘り強く調べていたら見つけたときのうれしさにすごく感動した。国語以外の授業でも活用することができた。

学び方を振り返る機会を設けることで、生徒自身が、課題解決のために自らの学び方を振り返り、評価、改善していこうという意欲が高まったと考えられる。

◆研究の課題について

(1) 教師の授業改善の意識向上

生徒が、学習内容や自らの学び方を振り返り、評価、改善していく主体的な学びをさらに進めていくためには、教師がそのような機会を作っていくことが何より大切である。講義型の授業ではなく、生徒が学習課題を解決すべき課題であると捉え、追求していける授業をめざし、教師は主体的・対話的で深い学びの視点での授業改善を行っていく必要がある。学習課題に対し、個人の考え方を生かし、協働して学習する機会を多くとるためにも、それぞれの授業の参観や討議の機会を増やし、生徒の「自ら学んでいこう」という意欲を、教職員全体で高めていく必要があると考えられる。

(2) 教師のアセスメント力の向上

生徒が学習課題を追求し、学ぶ喜びを感じられるようにするためには、生徒一人ひとりの学習がどのように進んでいるかを見取る必要がある。学習形態が多様化、個別化していく中で、教師は、生徒の学びのプロセスを捉えていくことが大切である。そのようにして、生徒の学びのプロセスを正しく捉えた上での教師の言葉掛けは、生徒が自分の学び方を見直したり、自信をもたせたりすることにつながっていくため、生徒の学びのプロセスや困り度を正しくアセスメントする力を、まずはつけていきたいと考える。

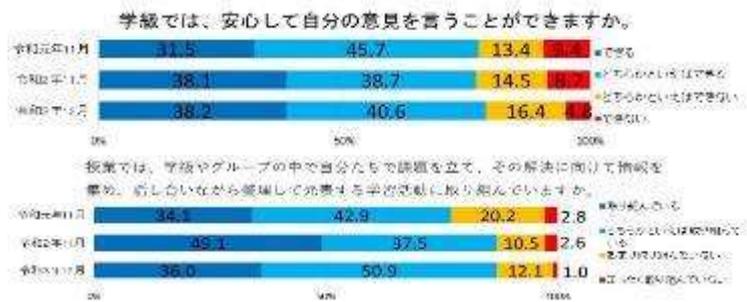


図11 生徒調査 (令和元年11月、令和2年11月、令和3年12月)

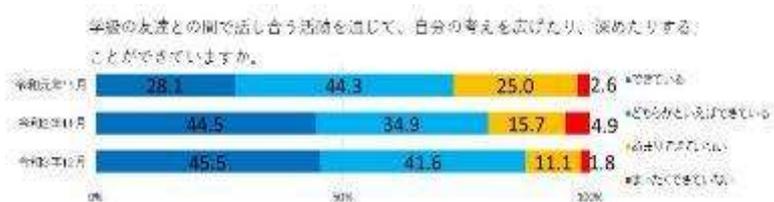


図12 生徒調査 (令和元年11月、令和2年11月、令和3年12月)